

お買い上げいただき誠にありがとうございます。本書の記述に間違いがございました。謹んでお詫び申し上げますとともに、ここに訂正申し上げます。

なお、刷数によって訂正の内容が異なりますので、奥付をご確認いただき、お手元の刷数に応じた正誤表をご覧ください。

1刷をお持ちの方は[こちら](#)から (最終更新日 2021年3月18日)

2刷をお持ちの方は[こちら](#)から (最終更新日 2021年3月18日)

3刷をお持ちの方は[こちら](#)から (最終更新日 2021年3月18日)

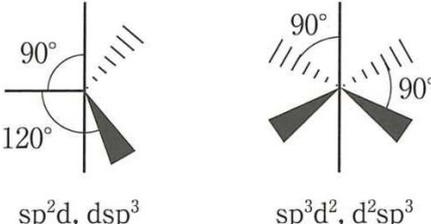
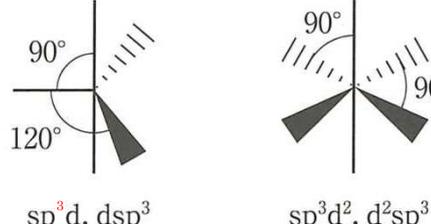
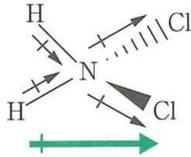
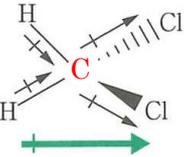
お買い上げいただき誠にありがとうございます。本書の記述に間違いがございました。謹んでお詫び申し上げますとともに、ここに訂正申し上げます。

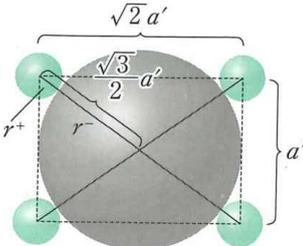
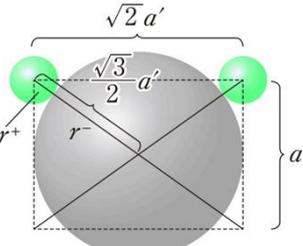
(最終更新日：2021.3.18)

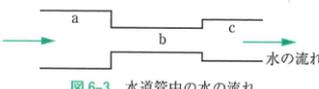
該当箇所	誤	正
表見返し	113 Uut ウンウントリウム (284)	113 Nh ニホニウム (278)
	115 Uup ウンウンペンチウム (288)	115 Mc モスコビウム (289)
	117 Uus ウンウンセプチウム	117 Ts テネシン
	118 Uuo ウンウンオクチウム	118 Og オガネソン
p.3 1.1 節の まとめ 6 行目	・通常中性子の数は陽子の数と同じであるが、中性子の数の異なる同位体も存在する。	・陽子の数は同じであるが、中性子の数が異なる元素を同位体という。
p.3 1.1 節の まとめ 7 行目	・原子量は各同位体の質量数（陽子の数+中性子の数）の加重平均である。	・原子量は各同位体の加重平均である。
p.6 1.4.2 1 行目	化合物のモル数を決定するには、	化合物の物質量を決定するには、
p.7 1.4 節の まとめ 3 行目	・分子の分子量，イオン化合物の式量は各構成元素の原子数の総和として求められる。	・分子の分子量，イオン化合物の式量は各構成元素の原子量の総和として求められる。
p.12 左 図 2-6	トムソンのモデル (a) と長岡らのモデル (b, 土屋モデル) および	トムソンのモデル (a) と長岡らのモデル (b, 土星モデル) および
p.13 2.2 節の まとめ 6 行目	陽子の質量 $m_p = 1.672\ 65 \times 10^{-27}\text{kg}$ 中性子の質量 $m_n = 1.672\ 65 \times 10^{-27}\text{kg}$	陽子の質量 $m_p = 1.672\ 62 \times 10^{-27}\text{kg}$ 中性子の質量 $m_n = 1.674\ 93 \times 10^{-27}\text{kg}$
p.14 コラム	光量子化説	光量子仮説
p.16 右 下から 7 行目の 数式	$= 6.993 \times 10^{-35}\ \text{nm}$ $\doteq 6.99 \times 10^{-35}\ \text{nm}$	$\doteq 6.99 \times 10^{-35}\ \text{m}$ $\doteq 6.99 \times 10^{-26}\ \text{nm}$

該当箇所	誤	正
p.18 図 2-12	<p>図 2-12 電磁放射のスペクトル</p>	<p>図 2-12 電磁放射のスペクトル</p>
p.19 右 21 行目	$= \frac{1/(97.25 \times 10^{-9} \text{ nm})}{(1/1^2) - (1/4^2)}$	$= \frac{1/(97.25 \times 10^{-9} \text{ m})}{(1/1^2) - (1/4^2)}$
p.20 右 9 行目	$E_1 = \frac{(6.63 \times 10^{-34}) \times (3.29 \times 10^{15}) \times (1.10 \times 10^7)}{1^2}$ $= -2.18 \times 10^{-18} \text{ J}$ $= -\frac{2.18 \times 10^{-18}}{1.60 \times 10^{-19}} = -13.6 \text{ eV}$	$E_1 = \frac{(6.626 \times 10^{-34}) \times (2.997 \times 10^8) \times (1.097 \times 10^7)}{1^2}$ $= -2.178 \times 10^{-18} \text{ J}$ $= -\frac{2.178 \times 10^{-18}}{1.602 \times 10^{-19}} = -13.60 \text{ eV}$
p.21 右 7 行目	図 2-15 のように、水素元素は	図 2-15 のように、水素原子は
p.22 左 式 2-49	$r_n = (5.292 + 10^{-11})n^2$	$r_n = (5.292 \times 10^{-11})mn^2$
p.26 左 6 行目	$= 5.79 \times 10^6$	$= 5.79 \times 10^6 \text{ ms}^{-1}$
p.28 左 式 2-61	$E = \dots\dots$	$H = \dots\dots$
p.28 右 式 2-72	$\frac{d^2\psi}{dx} = \dots\dots$	$\frac{d^2\psi}{dx^2} = \dots\dots$
p.29 左 式 2-79	$H = -\left(\frac{h^2}{8\pi^2m}\right)\left(\frac{\partial^2\psi}{\partial x^2} + \frac{\partial^2\psi}{\partial y^2} + \frac{\partial^2\psi}{\partial z^2}\right) + U_p$	$H = -\left(\frac{h^2}{8\pi^2m}\right)\left(\frac{\partial^2}{\partial x^2} + \frac{\partial^2}{\partial y^2} + \frac{\partial^2}{\partial z^2}\right) + U_p$
p.30 左 式 2-89	$\left\{-\frac{h^2}{8\pi^2m}\left(\frac{\partial^2\psi}{\partial x^2} + \frac{\partial^2\psi}{\partial y^2} + \frac{\partial^2\psi}{\partial z^2}\right)\right.$	$\left\{-\frac{h^2}{8\pi^2m}\left(\frac{\partial^2}{\partial x^2} + \frac{\partial^2}{\partial y^2} + \frac{\partial^2}{\partial z^2}\right)\right.$
p.30 左 式 2-91	$+\frac{1}{r^2 \sin^2 \theta} \frac{\partial \psi}{\partial \varphi} + \frac{8\pi^2m}{h^2} \left(E + \frac{e^2}{4\pi\epsilon_0 r}\right) = 0$	$+\frac{1}{r^2 \sin^2 \theta} \frac{\partial \psi}{\partial \varphi^2} + \frac{8\pi^2m}{h^2} \left(E + \frac{e^2}{4\pi\epsilon_0 r}\right) \psi = 0$
p.31 右 14 行目	radial doistribution function	radial distribution function
p.34 左 式 3-1	$E_n = -\frac{Zme^4}{8\epsilon_0^2 h^2 n^2}$ <p>(Z: 原子核の電荷, ϵ_0: 真空の……)</p>	$E_n = -\frac{me^4}{8\epsilon_0^2 h^2 n^2}$ <p>(ϵ_0: 真空の……)</p>
p.36 左 下から 2 行目	スピン量子数が同じ値の場合は別の軌道に入る。	スピン量子数が同じ値で別の軌道に入る。

該当箇所	誤	正
p.37 3.2 節のま とめ 1 行目	・一つの原子の中で、四つの量子数で示される一つの軌道には1個の電子のみ入ることができる。これをパウリの排他律とよぶ。	・一つの原子の中で、三つの量子数で示される一つの軌道には、スピン量子数の異なる2個の電子が入ることができる。
p.44 左 式 3-5	$\frac{1}{\lambda} = R_{\infty} Z_{\text{eff}}^2 \left(\frac{1}{n_1^2} - \frac{1}{n_2^2} \right)$	$\frac{1}{\lambda} = R_{\infty} \left(\frac{1}{n_1^2} - \frac{1}{n_2^2} \right)$
p.44 左 10 行目	この二つの状態を遷移するためのエネルギー ΔE がイオン化ポテンシャルで、	この二つの状態を遷移するためのエネルギー ΔE がイオン化エネルギーで、
p.44 右 4 行目	原子にイオン化ポテンシャル I よりも	原子にイオン化エネルギー I よりも
p.46 左 下から 2 行目	正負の電荷中心間の距離 d との積で表される。	正負の電荷中心間の距離 r との積で表される。
p.46 左 式 3-15	$\mu = qd$	$\mu = qr$
p.46 左 4 行目	1D=3.3356×10 ⁻³⁹ Cm である。	1D=3.3356×10 ⁻³⁰ Cm である。
p.47 左 下から 7 行目	ボーア半径は $r = a_0 n^2 / z$, $a_0 = \epsilon_0 h^2 / \pi m e^2$ で表され	ボーア半径は $r = a_0 n^2$, $a_0 = \epsilon_0 h^2 / \pi m e^2$ で表され
p.47 左 下から 3 行目	同一周期においては、 Z が大きくなるにつれ原子半径が小さくなり	同一周期においては、 Z_{eff} が大きくなるにつれ原子半径が小さくなり
p.48 表 3-8	表 3-8 代表的な典型元素のイオン半径[nm]	表 3-8 代表的な典型元素のイオン半径[pm]
p.48 表 3-9	表 3-9 代表的な遷移元素のイオン半径[nm]	表 3-9 代表的な遷移元素のイオン半径[Å]
p.49 3.7 節のま とめ 4 行目	同一周期においては、 Z が大きくなるにつれ	同一周期においては、 Z_{eff} が大きくなるにつれ
p.52 図 4-2		

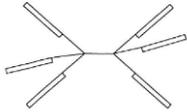
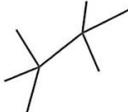
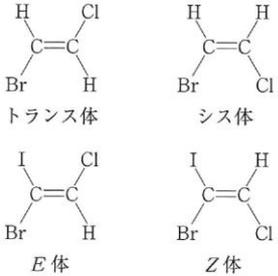
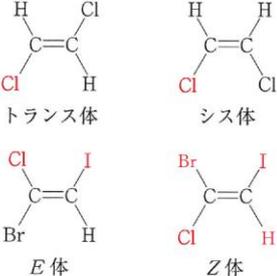
該当箇所	誤	正
p.55 左 5 行目	このような分子間力を水素結合 (hydrogen bond) という.	このような分子間力を水素結合という.
p.56 左 図 4-11	図 4-11 1,2-ヒドロキシアセトフェノンの分子内水素結合	図 4-11 2'-ヒドロキシアセトフェノンの分子内水素結合
p.56 左 11 行目	1,2-ヒドロキシアセトフェノンでは図 4-11 のような	2'-ヒドロキシアセトフェノンでは図 4-11 のような
p.59 図 4-13	 <p>sp²d, dsp³ sp³d², d²sp³</p> <p>図 4-13 混成軌道の形</p>	 <p>sp³d, dsp³ sp³d², d²sp³</p> <p>図 4-13 混成軌道の形</p>
p.60 左 6 行目	したがって、二つの炭素原子と、四つの水素原子は同一平面上に存在し、この平面に垂直に残った 2p 軌道が隣接している。隣接した 2p 軌道にはそれぞれ電子が 1 個ずつ満たされており、これらは side by side の重なりにより π 結合を形成する。	隣接した 2p 軌道にはそれぞれ電子が 1 個ずつ満たされており、これらは side by side の重なりにより π 結合を形成する。したがって、二つの炭素原子と、四つの水素原子は同一平面上に存在し、この平面に垂直に残った 2p 軌道が隣接している。
p.62 4.3 節のま とめ 4 行め	・空軌道の相互作用に基づく結合	・占有軌道と空軌道の相互作用に基づく結合
p.63 左 11 行目	HCl が完全に H ⁺ と Cl ⁻ にイオン解離して	HCl が完全に H ⁺ と Cl ⁻ にイオン化して
p.63 左 25 行目	極性結合と同じように極性をもつ分子を	極性をもつ分子を
p.63 右 12 行目	水分子の分子構造は酸素原子の 2s 軌道と 3 個の 2p 軌道を使って説明できるが、	水分子の分子構造は酸素原子の 3 個の 2p 軌道を使って説明できるが、
p.64 図 4-30		
p.69 右 19 行目	壁との衝突による単位時間あたりの x 成分の運動量変化は $Nm\overline{v_x^2}$ となる。	壁との衝突による単位時間あたりの x 成分の運動量変化は $Nm\overline{v_x^2}/a$ となる。
p.71 左 2 行目	この容積は $(4/3)\pi d^3$ であるが、これは、一対の分子の排除容積であるため、1 分子あたりの排除容積は $(2/3)\pi d^3$ となる。ここで求めた排除容積は、1 分子の容積 $(\pi d^3/6)$ の 4 倍となっている。さらに、1 mol の分子の排除容積は $(2\pi/3)N_A d^3$ であり、これを b とすれば、 n mol では nb となり、分子の真に動きうる空間は $V-nb$ となる。	この体積は $(4/3)\pi d^3$ であるが、これは、一対の分子の排除体積であるため、1 分子あたりの排除体積は $(2/3)\pi d^3$ となる。ここで求めた排除体積は、1 分子の体積 $(\pi d^3/6)$ の 4 倍となっている。さらに、1 mol の分子の排除体積は $(2\pi/3)N_A d^3$ であり、これを b とすれば、 n mol では nb となり、分子の真に動きうる空間は $V-nb$ となる。

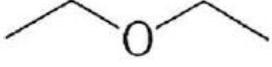
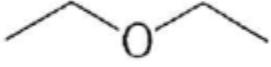
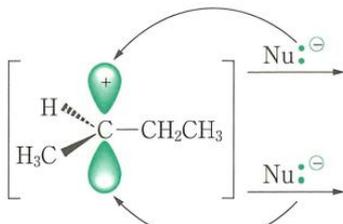
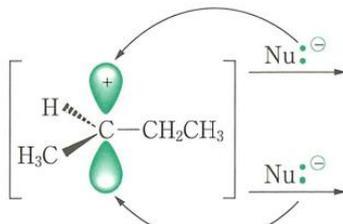
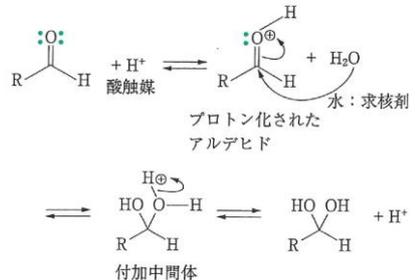
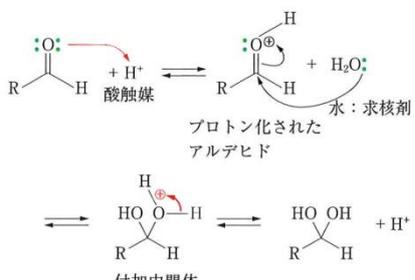
該当箇所	誤	正
p.71 左 17 行目	内側に引かれる力 f は,	内側に引かれる 圧力 f は,
p.73 左 8 行目	さらに, クラペイロン・クラウジウスの式を用いた	さらに, クラウジウス・クラペイロン の式を用いた
p.74 左 15 行目	e. 重量モル濃度 m	e. 質量 モル濃度 m
p.74 左 17 行目	ある溶液の溶質のモル数を $n_{\text{溶質}}$ および <u>溶媒</u> の kg 重量を $n_{\text{溶媒/kg}}$ とすると, $m = \frac{n_{\text{溶質}}}{n_{\text{溶媒/kg}}}$	ある溶液の溶質の 物質 量を $n_{\text{溶質}}$ および <u>溶媒</u> の kg 重量を $w_{\text{溶媒/kg}}$ とすると, $m = \frac{n_{\text{溶質}}}{w_{\text{溶媒/kg}}}$
p.74 左 22 行目	「溶液 1 L に溶けている溶質のモル数」で表される。 ある溶液の溶質のモル数を $n_{\text{溶質}}$ および	「溶液 1 L に溶けている溶質の 物質 量」で表される。 ある溶液の溶質の 物質 量を $n_{\text{溶質}}$ および
p.74 右 式 5-58	$= \frac{p_a}{p_a^*} = 1 - x_b = x_a \rightarrow p_a = p_a^* x_a$	$\frac{p_a}{p_a^*} = 1 - x_b = x_a \rightarrow p_a = p_a^* x_a$
p.75 右 15 行目	$c_b = n_b/V$ より, 式 (5-61) は	$c_b = n_b/V$ より, 式 (5-62) は
p.75 左 下から 2 行目	結晶の構造, 解析と分類, 固相の相変化などについて	結晶の構造解析と分類, 固相の相変化などについて
p.76 左 下から 8 行目	全結晶中の原子が互いに共有結合によって	結晶中の全原子 が互いに共有結合によって
p.78 左 図 5-8	図 5-8 面心立方格子における八面体隙間と四面体隙間	図 5-8 面心立方格子における八面体 間隙 と四面体 間隙
p.78 右 下から 3 行目	単位格子を a とする.	格子定数 を a とする.
p.79 左 下から 3 行目	よって, $r^+ = \sqrt{3} - \frac{\sqrt{2}}{2} \times a'$	よって, $r^+ = \left(\sqrt{3} - \frac{\sqrt{2}}{2}\right) \times a'$
p.79 右 図 5-12		
p.80 左 コラム 下から 3 行目	X 線回折法	X 線回 折 法

該当箇所	誤	正
p.80 右 下から 13 行目	反射された波長 λ の X 線が干渉作用により強め合う 条件は $n\lambda$ より,	反射された波長 λ の X 線が干渉作用により強め合う 条件は,
p.81 右 式 5-72	$\frac{dT}{dP} > 0$	$\frac{dP}{dT} > 0$
p.82 右 8 行目	変化が微分小の場合,	変化が微小の場合,
p.83 右 下から 3 行目	反応エンタルピー (enthalpy of reaction) ΔH_{298}°),	反応エンタルピー (enthalpy of reaction) (ΔH_{298}°),
p.85 左 7 行目	(2) 断熱可逆膨張 [B→C : B (P_2, V_2, T_1 →C	(2) 断熱可逆膨張 [B→C : B (P_2, V_2, T_1 →C
p.86 右 13 行目	(0.1013 MPa, 298.15 K)	(298.15 K, 0.1013 MPa)
p.87 左 3 行目	さらに, 仕事として体積変化の仕事のみの定温・定 容条件において	さらに, 定温・定容条件において
p.87 左 6 行目	可逆過程, 平衡 $(dA)_{T,V} = 0$	可逆過程, 平衡 $(dA)_{T,V} = 0$
p.90 右 21 行目	$2\text{AgNO}_3 + \text{BaCl}_2 \rightarrow 2\text{AgCl} + \text{Ba}(\text{NO}_3)_2$ $\text{NaOH} + \text{HCl} \rightarrow \text{NaCl} + \text{H}_2\text{O}$	$2\text{AgNO}_3(\text{aq}) + \text{BaCl}_2(\text{aq}) \rightarrow 2\text{AgCl}(\text{s}) + \text{Ba}(\text{NO}_3)_2(\text{aq})$ $\text{NaOH}(\text{aq}) + \text{HCl}(\text{aq}) \rightarrow \text{NaCl}(\text{aq}) + \text{H}_2\text{O}(\text{aq})$
p.91 右 12 行目	U を 2 次微分してみると, 平衡が安定か不安定かわ かる.	$U(x)$ を 2 次微分してみると, 平衡が安定か不安定かわ かる
p.93 右 図 6-3	 図 6-3 水道管中の水の流れ	(削除)
p.93 右 下から 14 行目	逐次反応として起こるのではない. したがって, 素 反応のうち一番遅い反応が律速反応となるとする概 念は, 大小のパイプでつながれた水道管の中の水の 流れて類推できる. すなわち, 図 6-3 のような水道 管中を水が流れるとすると, 全体の水の流れは, 一 番細い (b) の部分の流れの速さ (この部分の水の 流れが一番遅い) に支配されることになる.	逐次反応として起こる. したがって, 素反応のうち一 番遅い反応が律速反応となる.
p.94 左 式 6-32	$-\frac{d[\text{NO}_2]}{dt} = k'[\text{N}_2\text{O}_5]$	$\frac{d[\text{NO}_2]}{dt} = k'[\text{N}_2\text{O}_5]$
p.94 左 式 6-33	$-\frac{d[\text{O}_2]}{dt} = k'[\text{N}_2\text{O}_5]$	$\frac{d[\text{O}_2]}{dt} = k''[\text{N}_2\text{O}_5]$
p.94 右 下から 3 行目	比速度は約 100 倍異なる.	速度は約 100 倍異なる.
p.95 右 9 行目	この傾きを求めてみると $-9.70 \times 10^3 = -E_a/2.30R$ となり,	この傾きを求めてみると $-9.70 \times 10^3 \text{K} = -E_a/2.30R$ となり,

該当箇所	誤	正
p.96 左 式 6-45	$\frac{dN}{N_0} = \frac{m}{k_B t} \exp\left(-\frac{mc^2}{2k_B t}\right) cdc$	$\frac{dN}{N_0} = \frac{m}{k_B T} \exp\left(-\frac{mc^2}{2k_B T}\right) cdc$
p.96 左 式 6-51	$\frac{dN}{dt} = Z_{11} \exp\left(\frac{-E_a}{RT}\right) = 2N^2 r^2 \left(\frac{\pi k_B t}{m}\right)^{\frac{1}{2}} \exp\left(\frac{-E_a}{RT}\right)$	$\frac{dN}{dt} = Z_{11} \exp\left(\frac{-E_a}{RT}\right) = 2N^2 r^2 \left(\frac{\pi k_B T}{m}\right)^{\frac{1}{2}} \exp\left(\frac{-E_a}{RT}\right)$
p.96 右 式 6-56	$k_2 = \left(\frac{N_A^2}{10^6 N^2}\right) \frac{dC}{dt}$	$k_2 = \left(\frac{N_A}{10^3 N^2}\right) \frac{dN}{dt}$
p.97 右 式 6-58	$k = k_0 + k_{H^+}[H^+] + K_{OH^-}[OH^-]$	$k = k_0 + k_{H^+}[H^+] + k_{OH^-}[OH^-]$
p.97 右 式 6-59	$k = k_0 + k_{H^+}[H^+] + \frac{K_{OH^-} - K_w}{[H^+]}$	$k = k_0 + k_{H^+}[H^+] + \frac{K_{OH^-} \cdot K_w}{[H^+]}$
p.102 左 式 7-10	$K_w(298 \text{ K}) = 1.0 \times 10^{-14}$	$K_w(298 \text{ K}) = 1.0 \times 10^{-14} (\text{mol L}^{-1})^2$
p102 7.2 節ま とめ 4 行 目	$K_w(298 \text{ K}) = 1.0 \times 10^{-14}$	$K_w(298 \text{ K}) = 1.0 \times 10^{-14} (\text{mol L}^{-1})^2$
p102 左 下から 5 行目	$\text{pH} = -\log(2 \times 10^{-5}) = \log 2 - (-5) = -0.3 + 5 = 4.7$	$\text{pH} = -\log(2 \times 10^{-5}) = -\log 2 - (-5) = -0.3 + 5 = 4.7$
p102 右 下から 12 行目	また、純粋な水では pH=pOH=7 となることから、pH を用いた酸性、中性、塩基性の定義は以下のようになる。	また、純粋な水では 25°C において pH=pOH=7 となることから、pH を用いた 25°C における酸性、中性、塩基性の定義は以下のようになる。
p.105 左 下から 7 行目	$\begin{array}{ccc} \text{HCN} & \rightleftharpoons & \text{H}^+ + \text{CN}^- \\ (0.010 - x) & x & x \end{array}$	$\begin{array}{ccc} \text{HCN} & \rightleftharpoons & \text{H}^+ + \text{CN}^- \\ (0.010 \text{ mol L}^{-1} - x) & x & x \end{array}$
p.105 左 式 7-21	$4.9 \times 10^{-10} = \frac{x^2}{0.010 - x}$ $x^2 + 4.9 \times 10^{-10}x - 4.9 \times 10^{-12} = 0$	$4.9 \times 10^{-10} \text{ mol L}^{-1} = \frac{x^2}{0.010 \text{ mol L}^{-1} - x}$ $x^2 + 4.9 \times 10^{-10} \text{ mol L}^{-1}x - 4.9 \times 10^{-12} (\text{mol L}^{-1})^2 = 0$
p.105 右 8 行目	$4.9 \times 10^{-10} \approx \frac{x^2}{0.010}$	$4.9 \times 10^{-10} \text{ mol L}^{-1} \approx \frac{x^2}{0.010 \text{ mol L}^{-1}}$
p.106 左 式 7-24	$\text{CH}_3\text{COO}^- + \text{H}_2\text{O} \rightleftharpoons \text{CH}_3\text{COOH}^+ + \text{OH}^-$	$\text{CH}_3\text{COO}^- + \text{H}_2\text{O} \rightleftharpoons \text{CH}_3\text{COOH} + \text{OH}^-$
p.106 左 下から 8 行目	K_a は 1.8×10^{-5} であるのに対して、 0.1 mol L^{-1} の塩化ナトリウムの存在下では、 2.2×10^{-5} へと	K_a は $1.8 \times 10^{-5} \text{ mol L}^{-1}$ であるのに対して、 0.1 mol L^{-1} の塩化ナトリウムの存在下では、 $2.2 \times 10^{-5} \text{ mol L}^{-1}$ へと
p.106 右 4 行目	[CH ₃ COOH]= $x \text{ mol L}^{-1}$ とおくと $\text{CH}_3\text{COO}^- + \text{H}_2\text{O} \rightleftharpoons \text{CH}_3\text{COOH} + \text{OH}^-$ $0.10 - x \qquad x \qquad x$	[CH ₃ COOH]= $x[\text{mol L}^{-1}]$ とおくと $\text{CH}_3\text{COO}^- + \text{H}_2\text{O} \rightleftharpoons \text{CH}_3\text{COOH} + \text{OH}^-$ $0.10 \text{ mol L}^{-1} - x \qquad x \qquad x$

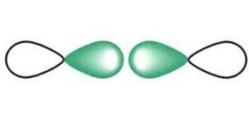
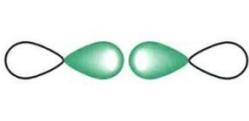
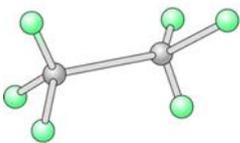
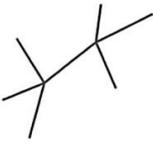
該当箇所	誤	正
	となる。したがって、 CH_3COO^- の塩基解離定数 K_b は $K_b = \frac{x^2}{0.10 - x} \approx \frac{x^2}{0.10}$	となる。したがって、 CH_3COO^- の塩基解離定数 K_b は $K_b = \frac{x^2}{0.10 \text{ mol L}^{-1} - x} \approx \frac{x^2}{0.10 \text{ mol L}^{-1}}$
p.106 右 下から 9 行目	$K_b = \frac{1 \times 10^{-14}}{1.75 \times 10^{-5}} = 5.7 \times 10^{-10}$	$K_b = \frac{1 \times 10^{-14} (\text{mol L}^{-1})^2}{1.75 \times 10^{-5} \text{ mol L}^{-1}} = 5.7 \times 10^{-10} \text{ mol L}^{-1}$
p.107 左 下から 12 行目	$K_a = \frac{[\text{H}^+][\text{CH}_3\text{COO}^-]}{[\text{CH}_3\text{COOH}]} (= 1.75 \times 10^{-5})$	$K_a = \frac{[\text{H}^+][\text{CH}_3\text{COO}^-]}{[\text{CH}_3\text{COOH}]} (= 1.75 \times 10^{-5} \text{ mol L}^{-1})$
p.107 右 2 行目	$\begin{aligned} \text{CH}_3\text{COONa} &\rightarrow \text{CH}_3\text{COO}^- + \text{Na}^+ \\ \text{CH}_3\text{COOH} &\rightarrow \text{CH}_3\text{COOH} + \text{H}^+ \end{aligned} \quad (7-26)$	$\begin{aligned} \text{CH}_3\text{COONa} &\rightleftharpoons \text{CH}_3\text{COO}^- + \text{Na}^+ \quad (7-23) \\ \text{CH}_3\text{COOH} &\rightarrow \text{CH}_3\text{COO}^- + \text{H}^+ \quad (7-26) \end{aligned}$
p.108 右 下から 6 行目	この緩衝液においては、 H_2PO^- が	この緩衝液においては、 H_2PO_4^- が
p.108 右 下から 1 行目	$\text{B} + \text{H}_2\text{PO}_4^{2-} \rightleftharpoons \text{BH}^+ + \text{HPO}_4^{2-}$	$\text{B} + \text{H}_2\text{PO}_4^- \rightleftharpoons \text{BH}^+ + \text{HPO}_4^{2-}$
p.109 右 14 行目	このときの pH は式 (7-19) により、	このときの pH は式 (7-22) により、
p.111 左 19 行目	$\text{pH} = \text{p}K_a \pm 1$	$\text{pH} = \text{p}K_{\text{In}} \pm 1$
p.112 7 章 章末問題 7-3 (2)	この溶液 1.0L に 0.01mol の塩酸を加えたときの pH 変化を求めなさい。	この溶液 1.0L に 0.01mol の塩酸を加えたときの pH 変化を求めなさい。ただし、体積と温度の変化は無視できるものとする。
p.112 7 章 章末問題 7-3 (3)	この溶液 1.0L に 0.01mol の酢酸を加えたときの pH 変化を求めなさい。	この溶液 1.0L に 0.01mol の酢酸を加えたときの pH 変化を求めなさい。ただし、体積と温度の変化は無視できるものとする。
p.113 左 12 行目	窒素、炭素、硫黄などの酸化物は	炭素、窒素などの酸化物は
p.116 右 5 行目	ここで、電位差は単独では測定できないので、電位差がわかっている別の系と組み合わせて電池を組んで、	ここで、電位は単独では測定できないので、電位がわかっている別の系と組み合わせて電池を組んで、
p.116 右 10 行目	その電位差はすべての温度において 0 であると約束されている。言い換えると、1 atm 下の水素ガス電極が 1 mol kg^{-1} の水素イオンを含む液と平衡にあるとき、この電極電位を温度によらず常に 0 と定めた。	その電位はすべての温度において 0 V であると約束されている。言い換えると、1 atm 下の水素ガス電極が 1 mol kg^{-1} の水素イオンを含む液と平衡にあるとき、この電極電位を温度によらず常に 0 V と定めた。
p.116 右 16 行目	先に述べたイオン化傾向は、	先に述べたイオン化列は、

該当箇所	誤	正								
p.116 右 22 行目	2 個の電子の移動が必要である場合,	z 個の電子の移動が必要である場合,								
p.118 左 表 8-1 下 から 14 行 目	<table border="1"> <thead> <tr> <th></th> <th>E°[V]</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>$F_2(g)+2e^-=2F^-$</td> <td>-2.89</td> </tr> </tbody> </table>		E° [V]	$F_2(g)+2e^-=2F^-$	-2.89	<table border="1"> <thead> <tr> <th></th> <th>E°[V]</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>$F_2(g)+2e^-=2F^-$</td> <td>2.89</td> </tr> </tbody> </table>		E° [V]	$F_2(g)+2e^-=2F^-$	2.89
	E° [V]									
$F_2(g)+2e^-=2F^-$	-2.89									
	E° [V]									
$F_2(g)+2e^-=2F^-$	2.89									
p.121 左 10 行目	すなわち, $E=E_2-0$ となる.	すなわち, $E=E_2-0$ V となる.								
p.121 左 22 行目	$0.337 - (-0.763) = 1.10$ V	0.337 V - $(-0.763$ V) = 1.100 V								
p.121 左 下から 5 行目	ここで, $-E^\circ$ は標準状態での起電力,	ここで, E° は標準状態での起電力,								
p.121 左 下から 3 行目	T は絶対温度 K である.	T は絶対温度 (K) である.								
p.121 右 8.3.4 1 行目	金属の腐食機構は, 湿食 (wet corosion), 乾食 (dry corosion) を問わず,	金属の腐食機構は, 湿食 (wet corrosion), 乾食 (dry corrosion) を問わず,								
p.163 右 図 11-2	$\begin{array}{c} \text{CH}_2=\text{CH} \quad \text{CH}_2\text{CH}_3 \\ \quad \\ \text{CH}_3\text{CH}_2\text{CH}_2\text{CHC}\equiv\text{CC}=\text{CH}_2 \end{array}$ 2-エチル-5-プロピル-1,6 -ヘプタジエン-3-イン 2-ethyl-5-propyl-1,6 -heptadiene-3-yne	$\begin{array}{c} \text{CH}_2=\text{CH} \quad \text{CH}_2\text{CH}_3 \\ \quad \\ \text{CH}_3\text{CH}_2\text{CH}_2\text{CHC}\equiv\text{CC}=\text{CH}_2 \end{array}$ 2-エチル-5-プロピル-1,6- ヘプタジエン-3-イン 2-ethyl-5-propyl-1,6- heptadiene-3-yne								
p.170 図 11-19	 骨格模型 (framework model)	 骨格模型 (framework model)								
p.174 図 11-29	 図 11-29 幾何異性体のシス-トランス表示と Z-E 表示	 図 11-29 幾何異性体のシス-トランス表示と Z-E 表示								
p.182 左 下から 4 行目	不飽和環状化合物のうち, 環骨格に $2n+2$ ($n=0$,	不飽和環状化合物のうち, 環骨格に $4n+2$ ($n=0$,								

該当箇所	誤	正
p.183 左 図 12-7	 <p>ジエチルエーテル diethylether</p>	 <p>ジエチルエーテル diethyl ether</p>
p.187 左 下から 11 行目	特に、アンモニアの水素をベンゼン環で置換した化合物は	特に、アンモニアの水素原子をベンゼン環で置換した化合物は
p.190 図 12-31	 <p>カルボンカチオン中間体</p>	 <p>カルボカチオン中間体</p>
p.192 左 図 12-35	 <p>図 12-35 求核付加反応の例</p>	 <p>図 12-35 求核付加反応の例</p>

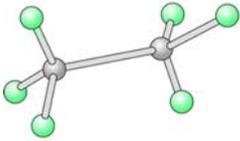
お買い上げいただき誠にありがとうございます。本書の記述に間違いがございました。謹んでお詫び申し上げますとともに、ここに訂正申し上げます。

(最終更新日：2021.3.18)

該当箇所	誤	正
p.112 7章 章末問題 7-3 (2)	この溶液 1.0L に 0.01mol の塩酸を加えたときの pH 変化を求めなさい。	この溶液 1.0L に 0.01mol の塩酸を加えたときの pH 変化を求めなさい。ただし、体積と温度の変化は無視できるものとする。
p.112 7章 章末問題 7-3 (3)	この溶液 1.0L に 0.01mol の酢酸を加えたときの pH 変化を求めなさい。	この溶液 1.0L に 0.01mol の酢酸を加えたときの pH 変化を求めなさい。ただし、体積と温度の変化は無視できるものとする。
p.148 左 10.1 7行目	また二つの p 軌道が側面-側面 (side to side) で重なると π 結合が生成する。	また二つの p 軌道が側面-側面 (side by side) で重なると π 結合が生成する。
p.148 左 図 10-1	 頭-頭 (head to head) 側面-側面 (side to side)	 頭-頭 (head to head) 側面-側面 (side by side)
p.170 11章 11.2 図 11.9	 骨格模型 (framework model)	 骨格模型 (framework model)

お買い上げいただき誠にありがとうございます。本書の記述に間違いがございました。謹んでお詫び申し上げますとともに、ここに訂正申し上げます。

(最終更新日：2021.3.18)

該当箇所	誤	正
p.112 7章 章末問題 7-3 (2)	この溶液 1.0L に 0.01mol の塩酸を加えたときの pH 変化を求めなさい。	この溶液 1.0L に 0.01mol の塩酸を加えたときの pH 変化を求めなさい。ただし、体積と温度の変化は無視できるものとする。
p.112 7章 章末問題 7-3 (3)	この溶液 1.0L に 0.01mol の酢酸を加えたときの pH 変化を求めなさい。	この溶液 1.0L に 0.01mol の酢酸を加えたときの pH 変化を求めなさい。ただし、体積と温度の変化は無視できるものとする。
p.170 11章 11.2 図 11.9	 <p>骨格模型 (framework model)</p>	 <p>骨格模型 (framework model)</p>